

福井八坂神社牛頭天王像及び女神像について

三橋 由吾（文化庁）

福井県丹生郡越前町の八坂神社に伝わる牛頭天王像は、その存在は知られていながら御神体として嚴重に秘されてきた。そのため、現存する牛頭天王像のなかで最も本格的な出来映えを示す重要作例でありながら、かつてこの像を実見した西川新次氏以降、研究が進んでこなかった。一方の女神像は八坂神社摂社の御塔神社に伝来した像で、頭上に天冠台と十一面を戴く姿が注目を集め、神仏習合の一形態を示す像として研究が積み重ねられている。発表者は両像を実査する機会を得ることができたため、調査成果を基に両像について検討する。

まずは形状品質構造等の基本情報を紹介する。次に、この基本情報を踏まえて、大きさ、造形、構造技法の3つの観点から類似点を挙げることで、両像の一具性について検討する。具体的には、髪際高がほぼ同一の値を示すこと、ともに平安時代後期の穏やかな作風を示しており、特に背面の造形が似通い、細部では天冠台の形状や彫法も共通していること、木取りが共通する一木造であり、両足部材や両腰脇の小材の矧ぎ方も一致すること、体幹部材像底の縁を残して鑿で浅く彫り窪める仕口が共通すること、両像ともに上背部に用途不明の鉄釘痕があること等の類似点を指摘し、両像が一具として製作されたことを明らかにする。

次に八坂神社の社史とも関連させつつ、製作年代を検討する。両像はともに彫りが浅く穏やかな平安時代後期風を示すが、女神像が全体としては穏やかな作風を示しながら鎌倉時代の新様を感じさせる写実表現が随所にみられること、一方の牛頭天王像は平安時代後期風を色濃く示すことを指摘し、両像の製作年代として平安時代末ごろを提案する。また、近世の史料ながら八坂神社の縁起に、推定される両像の製作年代と重なる嘉応元年に平重盛による造営があったと伝えることにも注目する。

続いて、女神像の神名について検討する。従来本像は十一面観音の垂迹神で八坂神社祭神の一柱でもある白山妙理権現とみる説が有力視されてきたが、牛頭天王の後である婆利女とする説も存在する。しかし、この説は牛頭天王と女神像の一具性が問題となるため、牛頭天王を調査が困難な状況から議論が進んでこなかった。今回、調査によって両像の一具性が明らかになったため、改めて婆利女説を検討する。

婆利女は確実な彫像は知られず不詳な点が多いが、『二十二社註式』に引く承平5年（935）年6月13日付の太政官符に、都の観慶寺（現在の京都八坂神社）に牛頭天王とその子である八王子とともに祀られていたことが記されている。この他、『玉蘂』承久2年（1220）4月14日条に、外記勘例として延久2年（1070）の火災の際の記録を引いており、この火災で牛頭天王と婆利女が被害を受け、さらにその大きさが各6尺ほどであったことが伝わる。これらの文献は主として牛頭天王の受容についての議論のなかで注目されてきたが、牛頭天王信仰の中心地ともいえる祇園社において、同じ大きさの牛頭天王と婆利女が一具の祭神として祀られていたことは、福井八坂神社の先例として注目される。

こうした都での牛頭天王、婆利女の様相に加え、十一面観音との関係性も踏まえて婆利女として造像された可能性を探る。